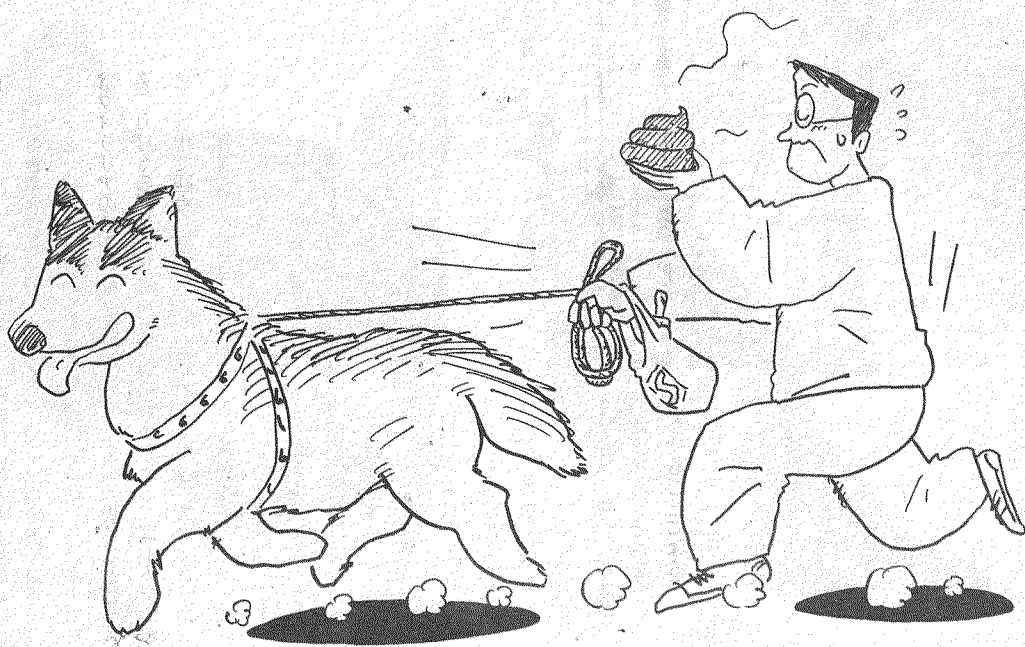




イラスト・えびなみつる

思わずさげ持ってしまう高価なウンチ

どれも、成犬は立てば人間ほどもある。大きなイヌがこれほどモてはやされるのは、日本ペット史上、かつてないことだという。

東京・青山の青山ケンネルでは、「昔は大きなイヌを飼う方といえはシェパード愛好家ぐらいで、ほとんどいませんでした。近ごろは売れていく十頭のうち、二頭は大きなイヌです。あまり吠えないし、見栄えがするせいでしょうか」

なぜ、大きなイヌがモテるのか、いろいろ説がある。まず、アメリカのドッグショーで一位に輝いたイヌが、三年ほどすると日本で人気者になるという「アメリカ流行三年後説」。

CMや映画に使われると必ず、人気のランクが上がるという「見たらほしくなっちゃった説」。

ハスキーの青い目がカッコいいとか、大型犬を連れて歩くと貴族のようだとか、単純に形から入るケースも多い。だが、それだけだろうか。

漫画家のヒサクニヒコさん宅のシベリアン・ハスキーに会ってみた。一歳三カ月。目と口のまわりが黒く、太く縁取りされているせいか、なんだか歌舞伎役者のよう。顔の大きさは人間と変わらない。

いし、表情がよく変わるので、近くにいると、人間と一緒にいるような感じがする。

「家族みたいなものです。とてもペットという感じがしない。ルールは守らせてるけど対等。目と耳で精いつばい、いろいろ主張してくる。それに家に帰ると、こいつだけは嬉しそうに走ってきて迎えてくれる。これがいんですよ」とヒサさんはいう。

「人間のような存在感」
どうやらこれがポイントのようだ。

日本が豊かになった証明なのか

東京都調布市の「菅原愛犬訓練所」の訓練士、菅原公夫さんは、「広めのマンションが増えたことも大きいと思いますよ」と話す。日本が豊かになったことの証明だというのだ。だが専門誌「愛犬ジャーナル」の河村健嗣さんは、

「子犬一匹が最低でも三十万、ときには百万円で売れる。財テク商品になってしまっんですね。日本には秋田犬とか柴犬だとか、世界に誇れるものもあるのに、外産犬



堀越夫人にじゃれつくハスキーは
かわいいオオカミのようだった

のほうがいいという迷信がある。イヌに関して後進国なんですよ」
千葉県市原市のハスキーの繁殖家、堀越勝美さんは、
「次の子どもだけを高く売するため、将来のことを考えずに何代も続いた血統を混ぜてしまっ。そんな繁殖家も増えてるようですね」
足立区のゴールデンの繁殖家、小原紀さんのところでも、
「産後に容姿が衰えるし、本来のよさを味わうならオスですよ」と説明しても、メスを希望する飼い主が三分の二なんだという。どうも、イヌまでおカネに見えるような雰囲気があるようだ。